

Title	世紀末イースト・エンドにおける慈善活動に駆り立てられる 淑女たち
Author	田中, 孝信
Citation	人文研究. 65 巻, p.81-96.
Issue Date	2014-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	堀内達夫教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

世紀末イースト・エンドにおける 慈善活動に駆り立てられる淑女たち

田中孝信

『北と南』のような19世紀半ばの小説には、慈善活動に動しむ未婚の若い淑女たちが描き出される。その背景には、現実の女性たちによるスラム街での慈善活動がある。それは世紀末になるにつれて強まり、特にロンドンの「外国」イースト・エンドへと彼女たちは惹きつけられる。彼女たちを駆り立てたのは何だったのだろうか。一義的には憐れみや罪の意識が考えられるが、それだけではないのではないか。そこに、既成の階級やジェンダー観を脅かす無秩序な欲求がなかったのだろうか。それを、現実の、およびフィクション上の女性たちの活動の中に探ってゆき、彼女たちが、同階級のみならず下層階級の女性たちとも交り合いながら、男性を排除した、ホモエロティックなまでの女だけの世界を築き上げてゆく様を明らかにする。彼女たちは、男性のお仕着せではない新たな自分を発見し、社会との関係を再構築する機会を得るのである。

はじめに

19世紀半ばの小説には、都市の下層階級地区を訪れて慈善活動に精を出す中・上流階級の女性たちが描き出される。その最も悪名高い例は、ディケンズ (Charles Dickens) の『荒涼館』(Bleak House, 1852-53) に登場するミセス・パーディグル (Mrs. Pardiggle) であろう。この乱暴で押しつけがましい訪問慈善活動家は、階級間の不信をいや増すだけである。それに対して、ギaskell (Elizabeth Gaskell) の『北と南』(North and South, 1855) のヒロイン、マーガレット (Margaret Hale) はヒギンズ一家 (the Higginsses) に常に礼儀正しく接し、尊敬の念や優しい友情を示す。労働者に対する理解を深めようとする姿勢は、彼女を労使間の対立を調停する立場に押し上げる。50年代末までに若い未婚女性の慈善活動はしばしば小説の中心テーマに据えられるようになり、慈善活動と結婚との対立と共存という問題が前面に出てくる。特にローダ・ブロートン (Rhoda Broughton) の『賢明でなくとも非常にうまく』(Not Wisely But Too Well, 1867) では、ヒロインのケイト (Kate Chester) は貧困地区への訪問を通して、女性らしい同情心だけでは慈善活動には不十分であり、マーガレットのように、相手に尊敬の念を持って接し、同等の人間なのだと認識することの重要性を学ぶ。“Lady Bountiful” 「恩着せがましく慈善を施す女性」像は、見境なくお金を分け与える者として否定されるのである。

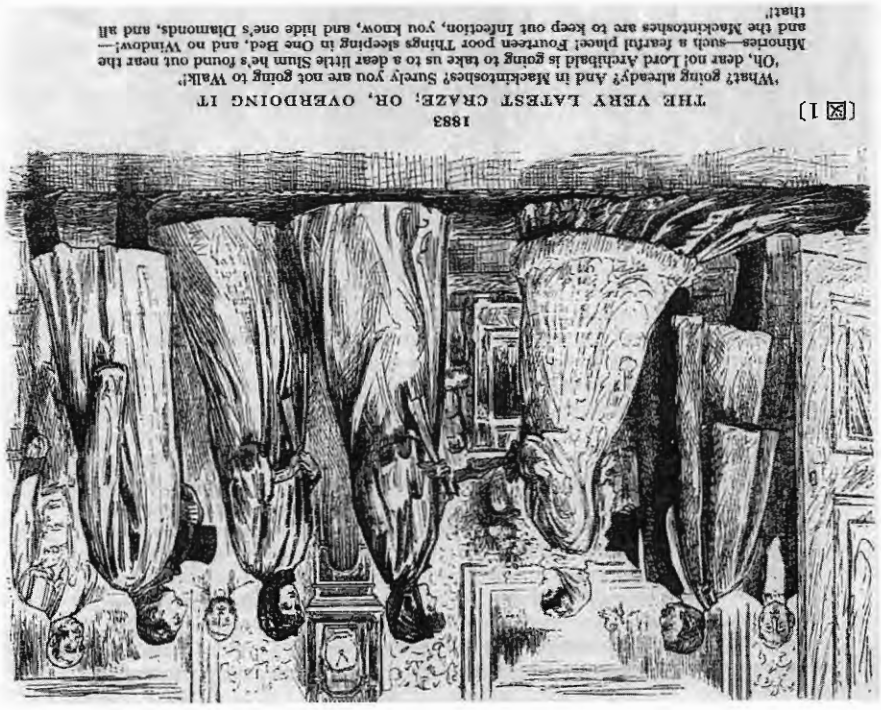
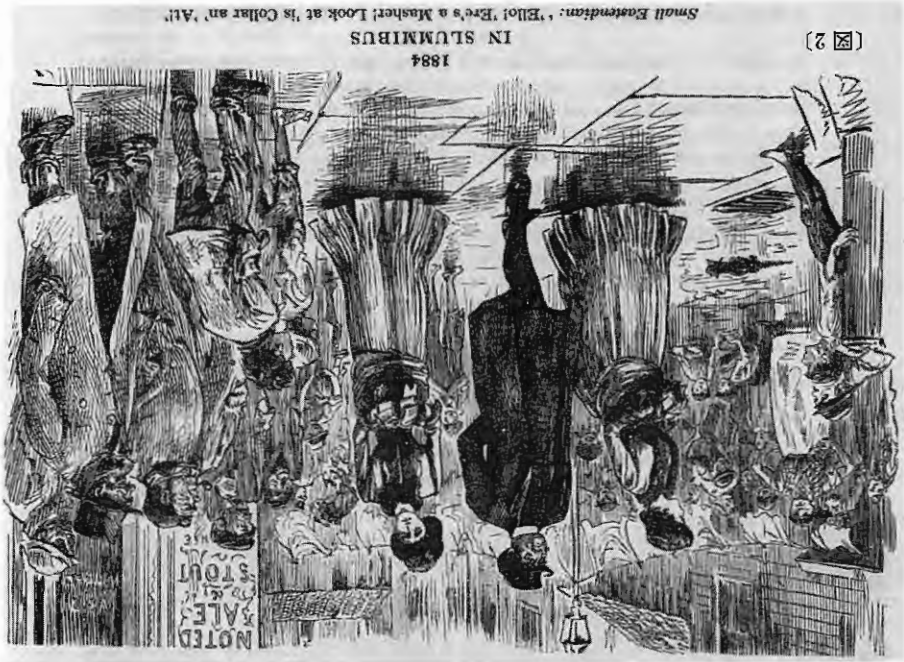
このように女性の慈善活動を描く小説が陸続と出版された背景には、現実の中・上流階級の女性によるスラム街での活発な慈善活動がある。「家庭の天使」として私領域に閉じ込められていた彼女たちは、余暇の増加に伴い、その有効活用的手段として公領域での慈善活動を行い始めたのだった。それは、ミセス・パーディグルを描くディケンズの反応に見られるように、男性からは女性の役割からの逸脱と見なされる危険を伴っていたが、ラスキン (John Ruskin) が『ごまとゆり』 (*Sesame and Lilies*, 1865) に収められた「王妃の庭園について」“Of Queen's Gardens”で述べる、女性の適切な領域は家庭を越えて周囲の公的空間にまで広がる (110)り、という主張に沿うものとして比較的男性にも受け入れられやすかったのも事実である。慈善活動に従事する女性たちも自分たちの行動を、家庭空間における影響力や同情心といった「女性的なもの」の発揮という義務の拡張として捉えていたのである。さらに一歩踏み込んで、1859年にすでに、『イギリス女性のためのジャーナル』 (*English Woman's Journal*) の編集長ベッシー・レイナー・パークス (Bessie Rayner Parkes) は、女性を家庭に閉じ込めるイデオロギーに異議を唱え、慈善活動を「公的天職」と呼び、女性は「あらゆる才能を自由に使えるという人間としての不可譲の権利を分かち合う資格がある」(194)と断言する。

下層階級地区での慈善活動は、世紀末になって中・上流階級の若い未婚女性たちの都市空間への進出が強まるにつれてますます活発になる。彼女たちは、もはや介添え役の中年女性シャペロンに付き添われることなく、一人で汽車やバスや地下鉄に乗って、買い物をしたり、美術館・レストラン・劇場を訪れるようになる (Walkowitz 46-52)。高級婦人雑誌『女王』 (*The Queen*) に1882年に掲載されたある論説がためらいがちに述べるように、これら全ての場所は、もし立派な若いご婦人方が、出会うかもしれない「危険や困難」に立ち向かう「勇気と賢明さ」を備えているのであれば、開かれているのである (Rappaport 138)。そして、彼女たちの中でも、知的で、自立心に富んだ、社会福祉に関心のある「新しい女性」たちが、スラム街での活動に従事するようになる。その場所として特に選ばれたのが、大英帝国の首都ロンドンの中に位置する、救世軍の創始者ブース将軍 (General William Booth) が「最暗黒のイングランド」と呼ぶところのイースト・エンドだったのだ。

世紀末当時、帝国拡大の反作用として流入する移民と度重なる恐慌によって生じた貧民の掃溜めと化したその混沌とした地区を、紳士淑女が「旅する」のが一種の流行だった。その行為は「スラミング」“slumming”と呼ばれた。OEDの定義によれば、それは「スラム街訪問、特に、慈善目的で」とある。しかし、動詞の「スラム」“slum”を見てみると、「恥ずべき目的のためにスラム街に入る、もしくは足繁く通う：たぶん不道徳な目的でうろつく」というのと、「慈善目的で、もしくは、特に流行りの娯楽として好奇心から、スラム街を訪れる」という定義がある。したがって「スラミング」は一つには、気晴らしやもっと邪な目的のためだったということになる。事実、『パンチ』 (*Punch*) 誌は1883年12月22日の「ごく最新の流行——もしくは、やり過ぎ」“The Very Latest Craze; or, Overdoing It” [図1] という挿絵で、

パーティーをそそくさと退出しスラム街に向かおうとする上流階級の男女を描き出す。女主人がなぜフード付きの丈の長い雨コートを着ているのかと尋ねると、一人の婦人が「アーチボールド卿がマイノリーズ近くに見つけられたかわいいうスラム街に私たちを連れて行って下さるの——たいそう恐ろしい所だそうです！ 一つのベッドに14人もの貧しい人が眠っているんですって、一つの窓もないんですって！——雨コートはね、私たちが感染するのを防いでくれるし、ダイヤモンドを隠したり、その他いろんなことに役立つのよ！」(294)と答える。ここで注目すべきは、アーチボールド卿が案内役を担っているにもかかわらず、スラミングがいかに心ない煽情的なものでしかないかという非難の矛先が淑女たちに向けられている点である。彼女たちは恐れているはずの危険を切望していると言える。また、1884年5月3日の「スラム見学用乗合馬車にて」“In Slummibus”〔図2〕は、“omnibus”に引っ掛けたその題からして、靴や服を汚さずに東ロンドンの貧困地区を見学するために馬車を雇う流行を揶揄したものである。周囲の貧民たちの凝視と軽蔑に晒されながらも自己満悦した牧師は、一人の「小さなイースト・エンド人」から「おやおや！ おしゃれな紳士(masher)のお通りだ！ やっこさんのカラーと帽子を見てみろよ！」(210)と冷やかされる。神に仕える男性が、「女たらし」を意味する“masher”と同一視されるのだ²⁾。明らかに住民たちは、彼の尊大な態度の背後に卑猥な動機を読み取っている。彼は、セックス・麻薬・ミュージックホールといった快楽を求めてやって来るウェスト・エンドの紳士連と何ら変わらないのである。そしてここでも、彼の両脇を固める二人の慎み深くも魅力的な若いご婦人が諷刺の対象となる。彼女たちは未開の貧民たちを教化しようとたぶん健全な書物を携えているのだろうが、関心はもっぱら周囲の物珍しい光景に向けられている。スラム街での善行は決して清廉潔白な動機に基づくものではないのである。

もちろん多くの中・上流階級の女性たちが、自分たちの快適な生活は貧しい人々の耐えがたい生活の上に成り立っているのだという、罪と償いの意識に囚われてイースト・エンドに向かったのも事実である。英国国教会牧師の娘たちのように、多くは他者へのキリスト教的奉仕の精神に突き動かされたものだったが、ビーアトリス・ポッター (Beatrice Potter) やエリナ・マルクス (Eleanor Marx) のような社会改革家や社会主義者も含まれていた。しかしながら、階級の壁によって厳格に分けられていた社会にあって、男性が仕事以外で自分たちの階級以外の人々と接する機会がなくなっていったのに対して、女性が逆に慈善活動を通して階級の境界を超えるようになっていった点、さらに、「スラミング」という語が慈善とは相容れない不道德な目的や窺視愛的な好奇心をも含んだ曖昧性を帯びている点を考慮すれば、女性たちの慈善活動が、混沌に満ちた世界に秩序をもたらす行為である半面、既成の階級やジェンダー観にとって脅威となる無秩序な要素を孕んでいたのではないか、この両者の間に不安定な緊張感が存在したのではないか、という疑念が生じてくる。本論では、彼女たちの中でも特に未婚の若い女性の活動の背後に隠された欲求を探ることで、その重層性を明らかにしてゆきたい。



1 男性支配からの解放と自己確立

独身女性がイースト・エンドでの慈善活動に従事するようになる理由の一つに、恋人との別れがある。ポッターがオクテイヴィア・ヒル (Octavia Hill) が運営する労働者用住宅キャサリン・ビルディングズの家賃徴収人になったのは、押しが強く野心的な政治家ジョゼフ・チェンバレン (Joseph Chamberlain) に強く惹かれながらも、妻に絶対服従を求めようとする彼に違和感を覚え、自分自身の考えや判断力を何よりも尊びたいという思いとの葛藤に苦しんだからだった (MacKenzie 115)。彼との思い通りにならない関係から慈善活動へと内面が移行していく様を、彼女は次のように記す。

私の周囲はどこともきらめいていますが、私の内面は暗闇です。愛の光に焦がれる盲目の欲求が帯びる暗闇なのです。全ての共感の念は私から閉め出されています。私は一人私自身の性質でもって立っているのですが、その性質は今や私にとって余りに強いものなのです。私は周囲の人々への私の義務に必死にしがみついています。それは自らの幸福を断念する魂にとって最後の希望なのです……。それでも私の前には、謙遜、優しさ、思慮分別という三人の乙女がおぼろげながら姿を現し立っています。そして私に向かって愛情に満ちた憐れみの気持ちで、ついてくるようにと手招きしてくれているのです。アーメン。
(MacKenzie 118・傍点は原文イタリックス)

これはフロイトが述べる性愛と利他愛との関係、すなわち「自分の愛を個々の対象にではなくすべての人間に平等に向けることによって、相手を失う危険から身を守り、また性愛の対象を捨象し性欲を本来の目的を制止された欲動に転化することによって、性器を使用する愛に不可避の各種の消長や幻滅を避ける」(291・傍点は原文イタリックス) 人々がいる、に通じるものである。また、マーガレット・ハークネス (Margaret Harkness) の『最暗黒のロンドンにて』(*In Darkest London*, 1889) に登場する、恋人の死の悲しみに暮れスラム街に慰めと自由を見出した医師は、慈善への衝動を不自然なまでに「この世の悲しみを気にかけるという病」(74) だと性心理的な解釈を加える。そしてポッターにとって、赴いた東ロンドンでの体験は「住民の薄汚い家を訪問するばかりの、始まりも終わりもない、ある種の気味の悪いロマンス」(132) だった。ここから分かるのは、スラムでの体験とチェンバレンとの恋愛は彼女の心の中で等価であり、前者は、彼女の内面に後者が引き起こした無秩序を映し出しているということだ。したがって彼女は、ますますスラムに秩序をもたらす行為に傾注することで、満たされない性的欲求や恋愛感情を昇華し、心の平安を取り戻そうとしたと解釈できる。

男女関係のもつれからの逃避という以外に、慈善活動は、男性中心社会そのものからの脱出

という面を含んでいる。『最暗黒のロンドンにて』のヒロイン、ルース (Ruth Weldon) は彼女に色目を使う、蛇に譬えられた狡猾な保護者ミスタ・ペムバー (Mr. Pember) から逃れるために救世軍に入って「スラム救済者」“slum savior”になり、「ロンドンの人間のくずを取り巻く汚れと害虫の中で生活」し、病人や飢えた人々のために「献身と熱情」の日々を送ろうとする (32-33)。実際、セツルメント活動に従事する高等教育を受けた独身女性たちは、スラム街の社会福祉施設を結婚の束縛や男性権威を排除した安全な避難所と見なし、その空間で思う存分自分たちの願望を実現しようとしたのである。結婚によって「私たちの限られた小さな世界から救出される全ての道が閉ざされるのではないか」(67)と危惧するエミリー・ペシク=ローレンス (Emmeline Pethick-Lawrence) は、「社会的分担という幾分破壊的な主義を実行するために」(72)西ロンドン・ミッションに加わり同じ考えを持った女性たちと一緒に住むことで、求めて止まなかった自由を得る。デボラー・エプスタイン・ノード (Deborah Epstein Nord) が述べるように、「偉大なるスピンスター」“Glorified Spinster”たちは異性愛に基づく家庭生活から外れて、「女同士の結婚」に安らぎを見出すのである (*Walking* 181-206)。確かに彼女たちの慈善活動は、救われる側を家父長制社会に取り込み、労働力再生産の道具として固定してしまうという意味で、既存の価値観を追認し強化する側面を持っていた。彼女たちの活躍で救われた弱者が相当数いたのは否定できないが、生活苦を知らない、それも未婚ゆえに家庭の適切な管理や赤ん坊の世話・子育ての経験もないレディーが恩着せがましく訪問し指導するのを、苦々しく感じていた貧者も少なからずいたことを忘れてはならない。概してセツルメントの設立は、スラム街の住人の必要性というより教育を受けた独身女性の必要性に応じたもので、その設立によって彼女たちは自分たちの階級の社会構造や信条をスラム街の「原住民」に持ち込み、そこを「植民地化」したとも言える。それは“petticoat government”「女性による支配」と呼ばれ、労働者用住宅の借家人たちの中には憤慨する者もいた (Harkness, *A City Girl* 11)。しかしながら、中流階級の応接間という退屈な空間での無益なおしゃべりから成る単調な日々、兄弟姉妹や年老いた両親の面倒を見るために「指定されたスピンスター」“designated spinster”になるかもしれない運命から逃れて、彼女たちがこれほどの自由を得たことはなかったし、そこでの教育・看護・伝道といった仕事を通して威厳を享受したのは間違いない。

そしてそうした体験は、慈善活動に従事する女性たちに人間的成長の機会を与えることになる。ミセス・ハンフリー・ウォード (Mrs. Humphry Ward) の小説『マーセラ』(*Marcella*, 1894) でヒロイン、マーセラは、過去の無謀な振舞いを償うためにイースト・エンドで地区看護婦の任に就く。マックスウェル卿 (Lord Maxwell) の息子オールダス (Aldous Raeburn) と別れた彼女は、看護婦としての長時間の勤務にもかかわらず以前より元気になる。彼女の人生は「より自由で、よりしなやかで、ついには自己を意識する余裕も生じる」(338)ようになる。昔の知り合いは、ロンドンで再会した彼女が崇高さすら帯びているのを発見する。

ハリンは彼女が椅子に深く腰掛けると、じっと彼女を見つめた。彼女の顔は何と人間らしく滋味に富むものになっていたことか！ 表情や顔色には相変わらず力任せなところがあつたが、初めて知り合った頃しばしば彼を不愉快にさせた、女性というより熱狂的な少年に見られるような、危険なまでに過度の熱心さといった様子はほとんど消え去ってしまっていた。顔つきは、何か新しいもの——悲しげではありながら慈悲深きもの、あらゆる哀感と成長の痛みで満たされたもの、そういったものの中に吸収されているように彼には思えた。(351)

さらに彼女は以前よりも知性の面で自信を深め、かつ体系的に物事を考え、社会主義や労働党の重要性といった話題についても、地方地主の肩を持ってではあるが、組合系の聡明な男たちと堂々と議論を戦わせることができるようになる。

明るい色の目をしたマーセラは、背筋を伸ばして座り、細い右手を膝の上にゆったりと置くと、復讐せんとばかりに、事実を徹底的に調べ出した。地主が支配する村と「開かれた」村との違い、様々な大地主が試みる農業の進歩向上に係わる実験、さらに、究極的には国家の使用に供するために土地を大きな区画で保持するシステムが、共同体にどんな利益をもたらすかを、社会主義者の視点すら取り入れて、フランスに見られる、社会主義など永久に不可能なシステムと比較しながら、探ったのだった。(365)

彼女はスラム街の貧困や苦しみとの出会いを通して道徳的・知的に成長し、自らを作り直したのである。

このような自己確立の過程で重要なのが、いかにして汚穢の空間に清潔さをもたらすかということだった。当時、貧困の生じる原因として二つの理由が考えられた。慈善組織協会は、貧困は個人の性格に原因があるとし、見境ない慈善に反対の立場を取り、個人の更生に重点を置いた。それに対してフェビアン協会のような社会主義者たちは、多くの労働者が生活するのに十分な賃金を得られない不平等な経済体制こそが問題であると主張した。しかし、この二分法は決して確固たるものではなく、個人の性格は「立派な」「respectable」労働者と臨時救済を受ける貧困者を区別する際の基準となった。そして、その性格が、外見上の清潔か不潔かに基づいて判断されたのだった。二つの概念は身体にとどまらず、道徳的意味合いをも帯びるわけだ。それは、80年代から1900年代にかけて家事や育児に関する書物を著わしたフィリス・ブラウン (Phyllis Browne) の以下の文から明らかである。

汚れが支配するところでは病気、悲惨さ、犯罪がその玉座の回りにまっすぐに立っている。自由、進歩、啓発が恥じ入って顔を隠している。人々の幸福を破壊し、女性の心を打

ち砕き、子どもを孤児にしてしまう全ての大病は、汚れの真ん中でお祭り騒ぎに興じているのだ。汚れが駆逐されたところでは、清らかさと啓発は快適な家庭を見つける。清潔になることは、善良で賢明で偉大になるための第一歩を踏み出すことであるというのは、これまで常に見出されてきたことである。(89)

汚穢は病気や伝染病と結び付くという非常に単純で時事的なものから、清潔さと啓発との同一性といったより理解しにくいもの、さらに人は「善良で、賢明で、偉大になるために」清潔であらねばならないという大胆な発言に至るまで、ブラウンの一節には実に様々な観念が融合している。こうした中流階級の価値観に則り、慈善活動家はスラム街の浄化に努めるのである。

しかし同時に、独身女性たちの中には汚穢に魅せられた者もいたのではないだろうか。確かに汚れはいくら落とそうとしても彼女たちから離れない。オックスフォード大学のレディー・マーガレット・ホール出身で³⁾、90年代に南ロンドンで知的な独身女性たちのコロニーで生活したアリス・ルーシー・ホドソン (Alice Lucy Hodson) は、「一日中ロンドンの泥の中を歩き回り、不潔な家々に出たり入ったりした後で、また、暗くて言葉にできないほど汚い階段を上り、黒くてねばねばした幾つもの小さな手と握手を交わした後で」(4) 入浴することの喜びを述べる。だが「汚れは非常に厄介なもので、何一つとして実際のところ、清潔なものはないのです。ちりや霧や煤がたえず積もっています。それも、目に見える容易に掃除ができる場所だけでなく、体の最も奥まった所にまでなのです」(6) と、その侵入に対してほとんど性的恐怖心を覚えたかのように告白する。彼女の表現に見られる露骨なまでの身体性、「黒くてねばねばした幾つもの小さな手」や「ちりや霧や煤」といった具合に強調される現実の汚れの描写から私たちは、「体の最も奥まった所」がどこなのか必然的に悟る。彼女の身体の最も私的で言葉にできない空間もまた、カーペットや窓同様、貧者の生活が生み出す汚れとの接触によって汚されるのである。どれだけのお湯を用いても元の清潔さを取り戻すことはできないのだ。けれども、それほど汚れを嫌悪するにもかかわらず、多くの独身女性がスラム街にとどまった。それはなぜか。一つには、もちろん街を清潔にしたいという欲求が、汚れとの出会いによって刺激されたからである。また、チェンバレンとの関係に悩むポッターのように、自らの内なる混沌状態から脱却し立ち直るためであったとも考えられる。しかし、汚れを管理しようと試みる彼女たちは、独身ゆえに家父長制イデオロギーから逸脱し、ジェンダーや性のヒエラルキーを混乱させる存在でもあったのだ。マーサ・ヴィシナス (Martha Vicinus) が指摘するように、セツルメントで働く未婚の女性たちは、中流階級の美德を広める役割を担う一方で、彼女たち自身が「逆の歩く証拠」(239) でもあるというパラドックスを抱えていたのである。この後者の側面がイースト・エンドの汚れに呼応し、彼女たちを惹きつける。「汚れる」ことはエリート女性たちの中の「汚れた」欲望を喚起する。それは、志を同じくする同階級の女性たちとの間に愛情溢れる共同体を建設するのみならず、自分たちの慈善活動の対象たる貧しい女性

たちへの単なる同情心ではないもっと深い共感の念へとつながるものなのである。内面のこうした相反する感情が作り出す緊張感の中で生活し、その矛盾を何らかの形で克服することが、彼女たちにとって極めて重要な事柄となったのだった。

2 女同士の絆とレスビアニズム

次に私たちはその具体的な例、すなわち、慈善活動に勤しむ独身女性が、仲間の同階級の女性のみならず、階級の壁を越えて下層階級の女性たちとも交り合いながら、男性を排除した女だけの世界を築き上げていく様を、1895年に出版されたL. T. ミード (Mrs. L. T. Meade) の『貧民街の王女』(*A Princess of the Gutter*, 1895) の中に見てゆこう。

幼くして両親を失った主人公のジョーン・プリンセプ (Joan Prinsep) は、ブルームズベリーの叔母の家に身を寄せている。22歳でケンブリッジ大学のガートン・コレッジ (Girton College) を出ると、彼女は亡き伯父の遺志を実行すべく、遺産を用いてイースト・エンドでの慈善活動に乗り出す。その際も繰り返し強調されてくるのは汚穢と清潔さの対比である。いかに清潔さを広め秩序をもたらすかが活動の最大の課題となる。ロンドンで最も悪名高いスラム街の一つ、ジャスパー・コートを訪れたジョーンは、「こわれた窓はぼろきれで塞がれ、床はごみで汚れ、害虫がこの身の毛のよだつような場所の至る所にわいてい」(73)る光景を目の当たりにして良心の呵責を覚える。彼女は出会った不潔な人々の身体に「きれいで柔らかい手」(71)を置くが、直接的な接触到彼女にはほとんど気絶せんばかりの衝撃を受ける。彼女の探訪は、ホドソンのような現実のスラム探訪者同様、熱いお風呂での消毒で終わる。しかし、これは彼女を清潔にするのみならず、貧者への奉仕という新たな生活に彼女を踏み出させる一種のバプテスマとなる。

スラム街に清潔さを広める試みと並行して描かれるのが、女同士の絆である。それまでの多くの慈善小説に見られたようなヒロインの結婚によって物語が閉じるということはない。ウォルター・ベザント (Walter Besant) のベストセラー小説『あらゆる種類と階級の人々』(*All Sorts and Conditions of Men*, 1882) において、裕福な醸造所の女相続人が東ロンドンの貧民のために身を捧げ、最終的にウェスト・エンドの男性慈善家と恋に落ちるのとは全く異なる。ジョーンは男性にも結婚にも全くロマンティックな関心を抱かない。周囲の貧民たちも彼女が異性と恋をするなどとは少しも思わない。従妹のフランチェスカ (Francesca Bannerman) の恋人が彼女に関心を示すが、嫌悪感を覚えるだけである。「男性的な」(120)と形容されたムア神父 (Father Moore) は、彼女の活動に助言を与えるだけで、両者の間には適切な距離が保たれている。ジャスパー・コートの住民を搾取するミスタ・シミンズ (Mr. Simmins) は「一種男性的な攻撃性を帯びた姿」(160)をしたセルフメイド・マンとして規定され、貧民に対する同情心を全く持ち合わせていない冷酷無情な人物として否定される。それどころかジョー

ン自身に「過度の男性的要素」(14)があることが、最初から読者には知らされる。

物語は女同士の関係を中心に展開する。ジョーンの一人称の語りを通して、彼女がもっぱら性愛感情を向けるのは、もう一人の従妹アン (Anne) やスラム街の「がさつな (rough) 少女」(121) の一人でカリスマ的存在感を持つマーサ・メイス (Martha Mace) である。情熱的な音楽家であるアンは、日々繰り返される結婚の話やいかにも女らしい冗談にうんざりしている。そうしたアンをジョーンは、ショアディッチの新しい住居と一緒に住もうと誘う。しかしアンはまだ因習的な中流階級の家庭を離れる決心がつかない。

彼女は私の手から自分の手をねじり離すと、去って行きました。彼女はすでに自分の殻に閉じこもってしまっていて、もうどんな方法を用いても、私が彼女の心に働きかけたり、影響を与えたりするのは無理でした。それでも、懐かしい家での最後の夜になる次の日の夜の間中、私はアンと彼女の弾いた勝利の行進〔ピアノ曲〕を、興奮と喜びの奇妙な (queer) 気持ちを覚えながら、思い返していたのでした。(114・傍点は筆者)

作品中“queer”という語は頻繁に使われ、ほとんどの場合「奇妙な」とか「普通でない」といった意味以上のものではない。だがこの一節では“queer”は「興奮と喜び」と結び付き、「普通でない」以上の何か魅力」といった意味を含んでいる。ここから、1900年以前にすでに“queer”はホモエロティックなニュアンスを帯び始めていたことが窺える。

ジョーンとマーサとの関係にはより明確に性愛感情が表されている。マーサに出会ったジョーンはすぐに彼女に惹かれる。彼女の賞賛の眼差しを通して、マーサは次のように描写される。

その少女はそのとき、入口のドアのところに立っていました。髪の毛は鋼のカーラーで巻かれていました。だらしない綿のブラウスと何かくすんだトビ色の素材の古いスカートを身に付けていましたが、スカートは一部褻のところが広がってしまっていて、後ろ側が少しではありましたが、汚れた状態で延びてしまっていました。彼女は体格のよい、ふくよかな魅力的な少女でしたが、顔は煤で覆われ、洗っていないせいで垢で汚れていました。……「今晚、私に会いに来ませんか？」……「でも私は、あなたのような女の子たちと友だちになるためにここに来たのよ」(120-21)

ジョーンは慈善活動の一環としてマーサの外見の汚れに関心を抱く。ジョーンは「汚れた少女」という社会学上の範疇に属する生きた見本と友だちになり、彼女の精神、身体、心を変えることで精神的な喜びを得たいと願う。しかし同時に、前者の後者に対する関心は性愛的な要素を帯びる。ジョーンはマーサの「汚れ」の下に強さと美しさを発見する。そして、彼女と彼女の「連れ合い」“mate”ルーシー (Lucy Ash) に対して「姉のように」(123) ならうと決意する。

ジョーンはマーサに彼女の身体的美しさを、「神様はあなたを美しくお造りになったの……神様はあなたに美しい顔と立派な体を与えて下さったの」(143)といったふうに、宗教的な言葉で表現する。マーサもまた、風邪で床に臥せったとき、見舞いに訪れたジョーンを「天使」(194)に譬える。ミードは家族のおよび宗教的なレトリックを用いることで、恋人同士といった口に出せない、あるいは想像すら許されない関係から距離を置こうとしている。だがその半面、ジョーンがマーサの願いに応じて豊かな栗色の髪の毛を解いて長く垂らしたり、マーサが病床からジョーンへの愛の告白をする場面といった、微妙にホモエロティックな場面が多く描かれているのも事実である。特に病床の場面では、ジョーンに対してマーサは、「私はあなたのことを愛しています、ジョーン。あなたのことを昼も夜も思っています。あなたのためなら私は何でもします——何でも——何でも」(185)と言い、ジョーンは「マーサの感謝の言葉はまるでシャンパンのようでした——強くて、新鮮で、刺激的で、ずっと入って来ました。私は言葉にできないほどありがたく思いました。恋人に甘美な言葉で賞賛されるどんな少女も、イースト・エンドのこの強い乙女の唇から出る甘い賞賛の言葉を私が味わった以上に味わうことはできませんでした」(194-95)と思う。サリー・ミッチェル (Sally Mitchell) は、ミードが作り出すのに一役買った「少女文化」が女学校や女子カレッジやセツルメント・ハウスでの愛情溢れるホモソーシャルな世界を賞賛しているとし、ミード作品中の同性愛的暗示を認めはするが、性愛的な解釈は、ヴィクトリア朝の少女たちがいかにミード作品を読み理解したかを知る際に現代的な感性を持ち込んでいると批判する(164-68)。確かに、『貧民街の王女』出版と同じ年の11月30日に『サタデー・レビュー』(Saturday Review)誌に掲載されたミードの『少女今昔』(*Girls New and Old*, 1895)の書評が、ミードは「健全で無垢な少女時代」(714)を魅力的に描き出すことで有名だと述べていることから明らかなように、読者はそれまでの彼女の作品が念頭にあり、何か「奇妙な」“queer”ものが物語中にあっても気づかなかったと考えられる。しかしながら、ジョーンとマーサの関係には性愛的傾向が読み取れるのではないだろうか。ミードは、夫アルフレッドの良き妻、三人の子どもたちの良き母、そして健全な少女小説の作者という社会的に定着したイメージの陰に隠れて、ホモエロティックで破壊的な内容のテキストを作り出しているのである。

それがクライマックスに達するのが、オールド・ベイリー (中央刑事裁判所) の独房での場面である。マーサは、ルーシーの夫マイケル・リー (Michael Lee) 殺害の犯人として絞首刑にされるのを明日に控えている。実は犯人はルーシーで、彼女は夫が元恋人のマーサとよりを戻そうとしたために耐え切れず殺害したのだったが、マーサはルーシーと女の赤ん坊ピース (Peace) の将来を慮って罪を被ったのである。ジョーンは直感的にマーサが犯人ではないと悟っている。処刑前日にジョーンがマーサを訪れたとき、それまで二人の関係に働いていた自制心は取り払われ、あからさまなまでにエロティックな場面が示される。語り手は何の弁明も不安も記さない。

彼女は自分の両手の中に私の両手を取ると、体を前に曲げてそれにキスし始めました。でも私は彼女の首に両腕を巻きました。すると彼女は、まるで餓死寸前のところで私に十分に満足のゆく食事を与えてもらったかのように、私の唇に何度も何度もキスしたのでした。私たちの背後のドアは閉じていました。付き添っていた女性の看守は独房の最も遠い所に引っ込んでおり、そこで私たちに背を向けて座り、前かがみの姿勢で何か針仕事をしていました。(295-96)

ここでも作者は、ジョーンが飢えているマーサに「十分に満足するまで食事を与えた」といったふうに、母と娘の関係という家族的なレトリックを用いて、読者を健全な読みに導こうとする。しかしこのキスは、それまで女性たちが交わしていた友情のキスとは全く異なる種類のものなのである。さらに注目すべきは、二人が心身ともに自由に相手を求め合った場所が、オールド・ベイリーという男性権力による取締りと秩序を象徴する施設の独房であるということだ。女性の看守が気を利かして背中を向けている間に、読者はマーサとジョーンの自然な言葉と行動の発露を何ら邪魔されずに見ることができる。スラム街の浄化の手段としての階級の壁を越えた姉妹愛は、ロマンティックな友情関係を越えて身体的親密さへと展開してゆくのである。

最終的に作り出されるのは、ジョーンを中心とした女性だけの信頼と愛情に満ちた共同体である。彼女の忠実な家政婦ミセス・キーズ (Mrs. Keys)、ウェスト・エンドの中流階級社会で要求される女らしさから逃れて来たアン、そして、死の間際のルーシーの告白によって釈放されたマーサを筆頭とする、ジョーンのクラブやパーティーに参加する多くの下層階級の少女たちがその構成員となる。そこでは男性や結婚は何の役割も果たさない。それどころか、マーサの養女となったピースが、ジョーンが下層階級の人々のために建てた「ジョーン・アパート」の「愛しい太陽の光」(307)として存在することからは、この空間が永続性を帯びたものであることが窺い知れる。マーセラが最後にオールダスへの愛を再確認し彼に罪の許しを請うのに対して、ジェンダー規範を侵したジョーンが罰せられることはない。それどころか、家父長制のイデオロギーに則って結婚し不満足な日々を送るフランセスカが「人生の表面にしか触れず、その深みの強さと甘美さにまで降りて行かなかった」(307)のに比べると、自分やアンは遥かに幸せだとジョーンは明言する。彼女は帝国の中心ロンドンに女性だけのアルカディアを何の代償も払うことなく築き上げるのである。

むすび

以上述べてきたように、中・上流階級の未婚女性による慈善活動は、私領域での女性の役割を押し広げた形で、公領域への彼女たちの進出を助ける。かつてなかったほどに都市空間を自由に動き回る彼女たちは、スラム街での活動を通して自己の内面のカタルシスを味わい、同階

【付記】

拙論は、2012年10月6日に中京大学で開催された日本ギヤスケル協会第24回大会のシンポジウム「19世紀イギリス小説と都市空間——ギヤスケルから世紀末へ」のパネリストとして発表した原稿に加筆修正を施したものである。

【注】

- 1) ラスキンは第86段落で以下のように述べている。
一般的に言えば、私たちの印象では、男性の義務は公的なものであるが、女性のそれは私的である、ということになっているようです。しかし、これは全くそうとばかりは申せません。……女性もまた、家庭に関して個人的な仕事なり義務を持つとともに、やはりその拡張に他ならないところの公的な仕事なり義務を持っているのです。……国家社会の一員としての女性の義務とは、国家の秩序・愉安・美しい装飾の達成に助力するということです。(110)
- 2) アリソン・アドバーガム (Alison Adburgham) は“masher”の出立ちについて以下のように述べている。
彼らは、とても長いぴったり体に合うオーバー、非常に丈の高いまっすぐなカラー、そしていつもスパッツ、といった出立ちである。彼らのシルクハットは両側で巻き上がっており、頬髭を生やして単眼鏡をかけ、紙巻きタバコや葉巻を吸い、しっかりと巻いた傘を杖代わりに携えている。彼らは気取り屋と呼ばれ、「あいつ」や「やつ」といった具合にきざな調子で話す。(145)
- 3) 木内泉は「オックスフォード大学やケンブリッジ大学の4つのカレッジのなかでも、特に共同生活における女性らしい徳を強調し、女子学生に良妻賢母や敬虔なキリスト教徒になるように教育していたレイディーマーガレットホール (Lady Margaret Hall) やニューナムカレッジ (Newnham College) では、活発に慈善組織協会やセトルメントに学生や卒業生をボランティアとして送り込んだ。しかし一方、より知的で女権拡張論者の教育者が多かったガートンカレッジ (Girton College) やソマービュカレッジ (Sommerville College) では、教育や訓練のあらゆる分野において男性と対等に競い合うように教育していたので、セトルメントにボランティアを送り寄付もしたが、活動にはあまり熱心ではなかった」(96)と述べ、参考論文として John P. Rousmaniere, “Cultural Hybrid in the Slums: The College Woman and the Settlement House, 1889-1894,” *American Quarterly* 22 (1970): 45-66 を挙げている。

【引用・参考文献】

- Adburgham, Alison. *A Punch History of Manners and Modes 1841-1940*. London: Hutchinson, 1961.
- Auerbach, Nina. *Women and the Demon: The Life of a Victorian Myth*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1982.
- Besant, Walter. *All Sorts and Conditions of Men*. 1882. New York: A. L. Burt, 1899.
- Broughton, Rhoda. *Not Wisely But Too Well*. 1867. London: British Library, 2010.
- Browne, Phillis. *Common-Sense Housekeeping*. 1880. Memphis, TN: General, 2010.
- Crackanthorpe, Blanche Alethea. “The Revolt of the Daughters.” *Nineteenth Century* (1894): 424-29.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. 1852-53. *Oxford Illustrated Dickens*. Oxford: OUP, 1978.
- Elliot, Dorice Williams. *The Angel out of the House: Philanthropy and Gender in Nineteenth-Century England*. Charlottesville: UP of Virginia, 2002.
- Free, Richard. “Settlements or Unsettlements?” *Nineteenth Century* (1908): 365-80.
- Freud, Sigmund. *Civilization, Society and Religion: Group Psychology, Civilization and Its Discontents and Other Works*. Ed. Albert Dickson. Vol. 12 of *Penguin Freud Library*. Harmondsworth: Penguin, 1991. 15 vols. [フロイト、ジークムント『文化・芸術論』高橋義孝他訳、「フロイト著作集3」、京都：人文書院、1970。]
- Gaskell, Elizabeth. *North and South*. 1855. *Oxford World's Classics*. Oxford: OUP, 1998.
- Harkness, Margaret. *A City Girl: A Realistic Story*. London: Vizitelly, 1887.
- . *In Darkest London*. 1889. Cambridge: Black Apollo, 2003.

級の女性や下層階級の女性たちと友情関係を育む。それは時として女だけの共同体の形成にもつながる。その中で、貧者に対して同情と圧制、善意と偏見・恩着せがましさとといった相反する態度を孕みながらも、ジェンダーや階級の壁を越えた人間らしさの重要性を訴えるのである。さらにはポッターのように、女性としての慈善活動に限界を感じ、社会問題に関して社会学的な生のデータを収集する、従来男性の職業と見なされた社会調査者になる者も出てくる。

それは彼女たちに、自分たち自身の価値観を身に付けさせることになる。女性のセツルメント運動を独身生活という中世の「野蛮さ」(378)の再発と見なすフリー牧師 (Rev. Free) は、次のように皮肉を込めて非難する。

全ての日常の甘美な家事——夫、子ども、それに彼らの世話——は彼女の心の中では奴隷の身分に自分を縛り付ける足枷と密接に結び付いているので、彼女が家庭という平凡な事柄を避け、その責任から逃れ、その「世界」の邪悪さ（そして骨折り仕事）を避けようと努めるのは、不自然なことではない。そして同時に、できるだけ通常の体験から離れた活動領域、とりわけ、セツルメントという擬似修道院生活を送ることで柔和な類の栄光を得ようとするのも、不自然なことではない。(377-78)

男性側から見たとき、彼女たちは、ニーナ・アウエルバッハ (Nina Auerbach) の言葉を使えば、「自己否定」“self-negation”ではなく「人生の快適で慣れ親しんだ秩序をひっくり返す好戦的で危険な潜在力」(117)を持った天使でしかない。だがイースト・エンドという混沌と汚穢の中に身をうずめる行為は、彼女たちに家父長制イデオロギーが規定するステレオタイプのものの見方の限界を認識させる。ポッターは、「低次元の単調ながらも興奮した生活、通りでの喧嘩や争いで大騒動を繰り返し引き起こす毎日、通りでの欲深い売買取引、些細な窃盗やギャンブル」を嘆きながらも、「イースト・エンドの生活の明るい面は、社交性とわずかなものでも気前よく分け合うことである」(MacKenzie 186)と述べる。「『イースト・エンドの人々の生活を私は楽しんでいる』……『彼らの努力と目的の現実性、悲しみや喜びの無邪気さ、それを私ははっきりと理解し、その悲喜劇の両面を見ることができると思う』」(Nord, *Apprenticeship* 159)と記す彼女は、その空間に人間らしい生活を見て取り魅せられる。私たちは、無秩序が現存の秩序を破壊することは認めながら、それが潜在的想像能力を持っていることを知っている。無秩序は危険と能力との両者を象徴しているのである。スラム街での体験によって彼女たちは、男性のお仕着せではない新たな自分を発見し、社会との関係を再構築する機会を得るのである。従来の自分自身を脱ぎ捨て再生するという意味で、ホドソンの言葉を使えば、「汚れる」“go dirty” (6) ことは、まさに「清潔になる」“get clean” (4) 可能性を帯びていると言えるのではないだろうか。

- Hodson, Alice Lucy. *Letters from a Settlement*. 1909. Memphis, TN: General, 2010.
- Jeffreys, Sheila. *The Spinster and Her Enemies: Feminism and Sexuality 1880-1930*. North Melbourne, Australia: Spinifex, 1985.
- Kelley, Victoria. *Soap and Water: Cleanliness, Dirt & the Working Classes in Victorian and Edwardian Britain*. London: L. B. Tauris, 2010.
- MacKenzie, Norman and Jeanne, eds. *The Diary of Beatrice Webb*. Vol. 1. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard UP, 1982. 3 vols.
- Meade, Elizabeth. *A Princess of the Gutter*. 1895. London: British Library, 2011.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England 1880-1915*. New York: Columbia UP, 1995.
- Nord, Deborah Epstein. *The Apprenticeship of Betrice Webb*. Ithaca, NY: Cornell UP, 1985.
- . *Walking the Victorian Streets: Women, Representation, and the City*. Ithaca: Cornell UP, 1995.
- Parks, Bessie Rayner. "Charity as a Portion of the Public Vocation of Women." *English Woman's Journal* 3 (1859): 193-96.
- Pethick-Lawrence, Emmeline. *My Part in a Changing World*. London: V. Gollancz, 1938.
- Prochaska, F. K. *Women and Philanthropy in Nineteenth-Century England*. Oxford: Clarendon, 1980.
- Rappaport, Diane. *Shopping for Pleasure: Women in the Making of London's West End*. Princeton, NJ: Princeton UP, 2000.
- Romanes, George J. "Mental Differences between Men and Women." *Nineteenth Century* 21 (1887): 654-67.
- Ross, Ellen, ed. *Slum Travelers: Ladies and London Poverty, 1860-1920*. Berkeley, CA: U of California P, 2007.
- Rousmaniere, John R. "Cultural Hybrid in the Slums: The College Woman and the Settlement House, 1889-1894." *American Quarterly* 22 (1970): 45-66.
- Ruskin, John. *Sesame and Lilies*. Vol. 1 of *The Works of John Ruskin*. Sunnyside: George Allen, 1880. 11 vols. (ラスキン、ジョン『ごまとゆり』木村正身訳、「世界の名著41」、中央公論社、1971。) *Saturday Review Supplement* 30 Nov. 1895: 714.
- Thomson, Patricia. *The Victorian Heroine: A Changing Ideal 1837-1873*. Westport, CT: Greenwood, 1978.
- Vicinus, Martha. *Independent Women: Work & Community for Single Women 1850-1920*. Chicago: U of Chicago P, 1985.
- Walkowitz, Judith R. *City of Dreadful Delight: Narratives of Sexual Danger in Late-Victorian London*. Chicago: U of Chicago P, 1992.
- Ward, Mrs. Humphry. *Marcella*. 1894. New York: Viking Penguin, 1985.
- 金澤周作『チャリティとイギリス近代』、京都大学学術出版会、2008。
- 木内泉「ビクトリア朝時代のイギリスの女性による慈善活動と女性解放運動」、『英米文化』27 (1997)、81-104。
- 指昭博『祝祭がレジャーに変わるとき——英国余暇生活史』、創知社、1993。

【2013年9月6日受付, 11月4日受理】

Ladies Impelled to Philanthropic Activities in the fin-de-siecle East End

TANAKA Takanobu

Mid-nineteenth century English novels such as Mrs. Gaskell's *North and South* present unmarried young ladies who are devoted to philanthropic activities. As its context, we can see the fact that many upper- and middle-class women engaged in philanthropic activities in slums. Their activities increased in force and frequency toward the end of the century. Especially the ladies got attracted to the East End, a *terra incognita* in London. What impelled them to those activities in that area? No doubt, their pity and sense of guilt over the poor is thought to be the foremost cause. But at the same time they seem to have desired a chaos which might subvert the established view of class and gender. This paper approaches ladies' motives for philanthropic activities in the East End through fact and fiction, and makes it clear that they built a homoerotic world constituted only of women through their relationship with not only the same-class but lower-class women. They finally found new selves which were not imposed upon them by the patriarchy and gained an opportunity to reconstruct their relation to society as a whole.